

将来予測について

21世紀末の予測：

気候変動に関する政府間パネル（IPCC）第5次評価報告書※1で用いられた2つのシナリオ（RCP2.6とRCP8.5）に基づく、20世紀末と比べた21世紀末※2の予測を記載しています。

RCP2.6シナリオ：

将来の世界平均気温が、工業化以前※3と比べて約2℃上昇することが想定されているシナリオで、

「2℃上昇シナリオ」

と表記しています。

パリ協定の2℃目標が達成された世界に相当し、IPCC第6次評価報告書では、SSP1-2.6シナリオに近いものです。

RCP8.5シナリオ：

将来の世界平均気温が、工業化以前※3と比べて約4℃上昇することが想定されているシナリオで、

「4℃上昇シナリオ」

と表記しています。

追加的な緩和策を取らなかった世界に相当し、IPCC第6次評価報告書では、SSP5-8.5シナリオに近いものです。

温暖化の程度に応じた予測：

20世紀末※2では100年に一回の頻度で発生していたような大雨が、工業化以前※3と比べて世界平均気温がそれぞれ**1.5℃、2℃、4℃**上昇した場合、どれくらいの頻度で発生するかを記載しています。なお、ここでは1日の降水量（日降水量）を解析しています。また、2℃上昇シナリオと4℃上昇シナリオにおいて、1.5℃、2℃、4℃それぞれの温度上昇が見込まれる、およその年代をそえて解説しています。

※1 最新のIPCC報告書は第6次評価報告書ですが、日本付近の予測で参照可能な結果の多くは第5次評価報告書に基づくためです。

※2 「21世紀末の予測」では、20世紀末は1980～1999年の平均、21世紀末は2076～2095年の平均です。

「温暖化の程度に応じた予測」では、20世紀末は1981～2010年を指します。

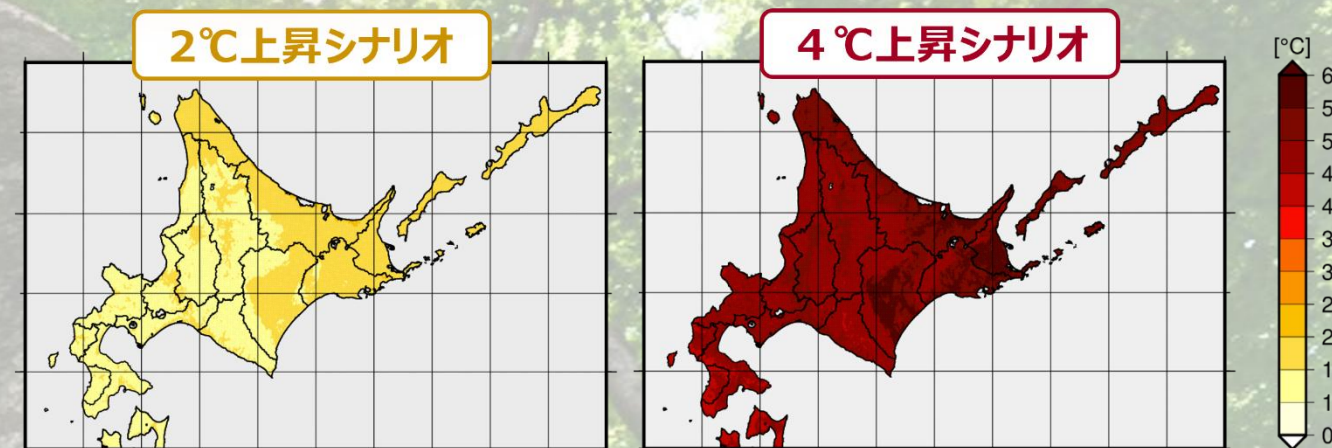
※3 工業化以前は1850～1900年の平均です。

上川地方の気候変動

気温の上昇



大雨の増加



年平均気温の将来予測（21世紀末）

20世紀末からの上昇量（シナリオ等の詳細は裏面参照）
狭い領域の変化は不確実性が大きいので、振興局程度の広範囲の変化に着目ください

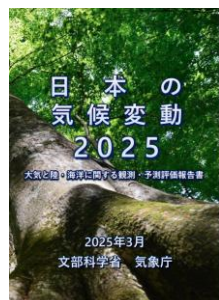
雪の減少



全国の情報はこちら

日本の気候変動2025

（文部科学省・気象庁、令和7年3月公表）



日本の気候変動の現状と予測に関する最新の知見を紹介

気象庁ホームページからご覧ください↓



解説動画はこちらから↓



気候変動の影響と適応

気候変動適応情報プラットフォーム

（A-PLAT（国立環境研究所））

気候変動は様々な分野に影響を及ぼします。具体的な影響やそれに対応するための適応策については、A-PLATも参照ください。



A-PLAT



A-PLATのホームページ

気候変動適応

検索



旭川地方気象台 旭川市宮前1条3丁目3番15号 TEL: 0166-32-7102

札幌管区気象台 札幌市中央区北2条西18-2 TEL: 011-611-6174

このリーフレットでは、「日本の気候変動2025」（文部科学省・気象庁）に基づき、これまでの気候の変化と将来予測に関する情報をまとめています。

北海道地方の気候の変化については、気象庁ホームページからご覧になれます。



気象庁ホームページ「日本の各地域における気候の変化」

令和7年3月

旭川地方気象台・札幌管区気象台

気温の上昇

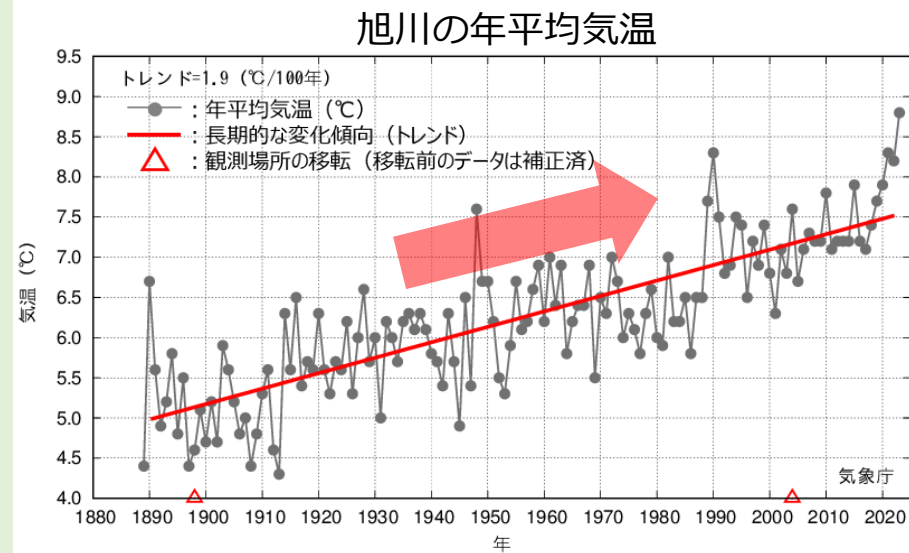
これまでの変化

100年あたり
1.9℃上昇※

※右のグラフのデータから算出した
100年あたりの平均的な上昇率です。

最新の変化傾向は、
A-PLAT「気象観測
データの長期変化の
傾向」をご覧ください。

<https://adaptation-platform.nies.go.jp/data/jma-obs/index.html>



21世紀末の予測

⚠ 熱中症等のリスク増加

上川地方の年平均気温は、20世紀末と比べて、
2℃上昇シナリオで約**1.5℃**、4℃上昇シナリオで約**4.9℃**上昇

年間真夏日日数 6日 → **約10日 / 約33日**
年間真冬日日数 91日 → **約72日 / 約31日**

日数は左から、上川地方平均の20世紀末の観測値、21世紀末（2℃ / 4℃上昇シナリオ）の予測値

真夏日は日最高気温が30℃以上、真冬日は日最高気温が0℃未満の日です。

雪の減少

これまでの変化

北海道日本海側の年最深積雪には
減少傾向が現れています。

⚠ 渇水リスク、産業等への影響

21世紀末の予測

北海道日本海側の年最深積雪は、
20世紀末と比べて、
2℃上昇シナリオでは約**11%**、
4℃上昇シナリオでは約**38%**減少

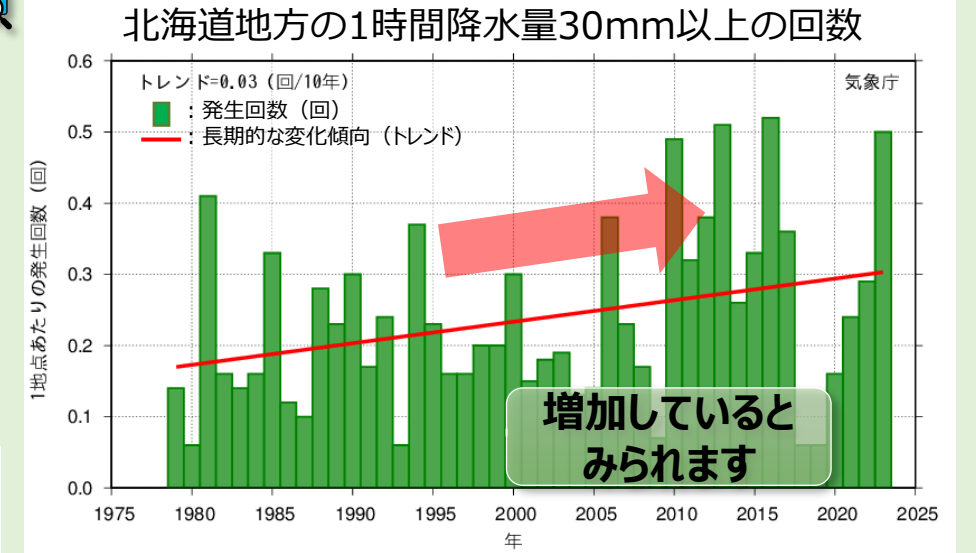
大雨の増加

これまでの変化

近年の豪雨事例の中には、地球温暖化に伴う
水蒸気量の増加も影響
したと評価しているものが
あります。

最新の変化傾向は、
A-PLAT「気象観測
データの長期変化の
傾向」をご覧ください。

<https://adaptation-platform.nies.go.jp/data/jma-obs/index.html>



21世紀末の予測

傘をさしていてもぬれる
ような降り方です

北海道地方の1時間降水量30mm以上の年間発生回数は、
20世紀末と比べて、
2℃上昇シナリオでは約**1.8倍**、4℃上昇シナリオでは約**4.6倍**に増加

⚠ 土砂災害や洪水等の災害リスク増加

温暖化の程度に応じた予測

20世紀末には100年に一回しか起こらなかった大雨※1が**より頻繁に**

北海道地方 の予測	温暖化の程度	1.5℃上昇	2℃上昇	4℃上昇
	20世紀末	2023-2042年頃 2018-2037年頃	※2 2032-2051年頃	2075-2094年頃
100年当たり の発生頻度	1回	約1.8回	約2.6回	約6.4回

観測データ※3による推定では、
100年に一回の大雨（日降水量）
は、旭川では約168mmです。
温暖化が進むと、こうした大雨が
より頻繁に発生します。

※1 ここでは日降水量に基づく結果を示します。
※2 2031-2050年頃に2℃上昇となる可能性はあります。
※3 1976-2023年のうち利用可能な観測データです。

詳しい情報は、気象庁ホームページ
「極端現象発生頻度マップ」をご覧ください。

